

ヤーコプ・グリム「厳密でない学問の価値について」——試訳

Jacob Grimm, Über den Werth der ungenauen Wissenschaften.(1846)

稲 福 日出夫

訳者まえがき：

以下に訳出を試みたのは、ヤーコプ・グリム（1785-1863）が、1846年9月25日におこなった講演である。彼の『小品集』第7巻に収められている。Jacob Grimm, Kleinere Schriften, Bd. 7. Hildesheim 1991, SS. 563-566.

1846年、第一回ゲルマニステン大会が開かれた（9月24-26日）。会場となったのは、フランクフルトの中心部にある、かつては神聖ローマ帝国皇帝の選挙が行われたレーマー（Römer ローマ人の館）と呼ばれる旧市庁舎にある皇帝の間であった。大会は、全体会議のほかに、法律、歴史、言語の三部会で構成されていた。大会初日の全体会議で議長に選出されたヤーコプ・グリムは、この大会で三つの講演を行なっている。

一つ目の講演、「この大会に結集した三つの学問の相互関係とその繋がりについて」。この講演は、議長選への感謝の表明から始まり、いわば、その受諾講演の意味を帯びたものである。が、内容は、儀礼的挨拶をはるかに超える。

「私は微力ながら、祖国の法と祖国の歴史の研究に取り組んでまいりました。が、私にとってもっとも馴染んだ研究分野は、やはり言語であります。そこで、私が、ここに参集された学問、つまり、法学、歴史、言語の三分野について、言語の観点から言及することは、必ずしも不適切ではないと思います。と申しますのも、言語は、私たちを結びつける絆であるからです。先ず、単純な問いを発してみたい。一体、民族とは何でしょうか（Was ist ein Volk ?）。答えは、至極簡単であります。民族とは同一の言語を話している人間の総体であります。すべての崇高な民族にとって、その民族の言語は最高の誇りであり宝であります。（略）ドイツの法学が、祖国の歴史学や言語学の研究と内的に結びつくこと、これら三つの学問が統合される

ことは、私たちのこの大会において、きわめて自然であり適切であるように思われます」。

9月25日におこなわれた二つ目の講演が、ここに訳出した「厳密でない学問の価値について」である。言語学や歴史学、それに歴史の所産たる法学。それら三分野を「厳密でない学問」と捉え、それらに固有の独自の価値について論じている。

大会最終日の26日におこなわれた三つ目の講演のタイトルは「ゲルマニステンという名称について」である。ヤーコブは、みずからおこなったこれまでの二回の講演を踏まえ、「この三分野の学問にあつては、ドイツ性 (Deutschheit) という概念が共通しております」と述べる。その上で、「ゲルマニスト」という表現を、この三分野を統合する名称として用いてはどうか、と提案する。「ゲルマニステンという名称を、法学者と歴史学者、言語学者に拡張してはどうでしょうか」という提案である。これまで、ローマ法の研究者 (ロマニスト) と対比する意味で用いられていたゲルマニストという表現を拡張しようというのである。「これまでゲルマン・ドイツ法の専門家の呼称であつた〈ゲルマニスト〉という名称を、歴史および言語の研究という広義に転用したのは、他ならぬヤーコブ・グリムであつた」(G. デイルヒャー)といわれている。この三つの講演は「いずれもゲルマニステン大会の意義を宣言したものであり、グリムにしかなしえない講演であつた」(堅田 剛)。なお、このゲルマニステン大会のもつ政治的、思想史的意義については、河上倫逸編『ドイツ近代の意識と社会 — 法学的・文学的ゲルマニスティクのアンビヴァレンツ —』(ミネルヴァ書房、1987年)、堅田 剛『ヤーコブ・グリムとその時代 — 「三月前期」の法思想 —』(御茶の水書房、2009年)、拙訳『ヤーコブ・グリム 郷土愛について — 埋もれた法の探訪者の生涯 —』(編集工房 東洋企画、2006年) 序論、参照。

これらの講演によって、ヤーコブ・グリムの法学観、法学的世界観を窺い知ることができるように思われる。が、私など、この「拡張されたゲルマニステン」という表現に接すると、奄美在住の作家であつた島尾敏雄が1960年代初期に提唱した「ヤポネシア論」、また、国際化時代における「南からの発想」といった表現、あるいは逆に、日本列島の南端から北へ向かうのではなく、視座を反転させる「南への発想」といった議論を、つい連想してしまう。さらには、南から／南へ、といった発想の基軸そのもの、郷土を対象とした学「沖縄学」といわれるものを、グリムの

世界観で捉え返すと、どのような情景、状況が浮かび上がってくるだろうか、とも思う。「日本学」(Japanologie)を検証し、南に点在するマイクロネシアやメラネシアの世界を眺める視座を獲得する「拡張される沖縄学」。また、最近登場した新たな概念「東アジア」のなかに琉球・沖縄を位置づける手がかりに、「厳密でない学問」が何か役立つのではないか、と思ったりもする。

以下の試訳について。ヤーコブ・グリムを読むとき常に感じることは、文体・書法がいかにも古風で読みづらい。短い講演録ではあるが、思わぬ誤解があるかもしれない。ご指摘くだされば有り難い。なお、段落については、読みやすいように私の方で適宜設けたものが多々ある。

講演「厳密でない学問の価値について」

リヒテンベルク (Georg Christoph Lichtenberg, 1742-1799, ドイツの科学者、物理学者。当時、諷刺家としての彼の著作も人気があった。一訳者補足) は、学問を4種に分類しております。彼によれば、先ず初めに、その学問を修めることによって、名誉が授かる類の部門がある、といたします。二つ目は、パン (Brot) を得るための部門。三つ目は、名誉とパン、両方を授けてくれる分野。最後に、名誉もパンも、どちらも与かることのない分野。学問の世界を、彼はこのように区分しております。彼は、機知に富んだその方法を、詳細に論じており、また、その分類の仕方は世間に広まっております。しかし、パンのための学問 (Brotwissenschaft) という言葉は、決して彼が案出した造語ではなく、彼以前から広く通用していた表現であり、その由来、語義は、以下のものであります。つまり、草原で草を食んだり大地を耕すといったことをする代わりに、あれこれ思考をめぐらし思いにふけることを欲するひとは、おそらく、生きる糧を得るため、彼にパンを与える職業を引き受けなければならぬ、ということを経験するものである、という趣意であります。しかしながら、幸運にもそうした職業に就いた後も、学問的思考が必要となる多くの場面に出くわすこととなります。そうした職業に就こうとするひとなど誰もいなかった遠い昔は、たぶん良き時代だったのだらうと思います。

また、学生たちが大学で講義を受講する際、彼らがどのように学問を区分しているのか、ということも周知のことです。学生は、学問を2種類に区分しております。つまり、大学で認定を受けたという証明書を交付してもらわなければならない学問と、認定証を必要としない学問という2種類に区分しております。その基準によって、それぞれの講義を受講しようかどうか選択しております。しかし、認定証を受け取ることができるかどうかといったことに拘泥することなく、成り行きまかせで無分別にただ何となく勉強することより、確かに、2種類に区分して学ぶことのほうがよほど屈託なく素晴らしいことだとは思いますが。その先に見える明かりは、社会の実相を知る眼力を養う、と捉えられ、真の学問とは、光りさす日中に似ている、というのであります。

しかし、私は学問を、このような間違った方法で分類するというやり方には同意できません。ここでは、むしろ或るフランス人によって用いられた区分の仕方、すなわち精密な (exact) な学問と精密でない (inexact) 学問という区分の仕方を尊重し、それに依拠したいと思います。ここで何故 (外来語ではなく、固有の一訳者補足) ドイツ語を用いないのかと問われるならば、厳密な (genau) 学問と厳密でない (ungenau) 学問に大別する仕方、ということになります。

厳密な学問に含まれるのは、みなさんもよくご存じのように、あらゆる命題をきわめて精密に証明する学問、すなわち数学や化学、物理学といった学問などです。これらの学問が追究しようとしていることはすべて、そうした精緻さや明晰さ (Scharfe) を欠いてしまえば何の役にもたちません。それに対して、厳密でない学問には、まさに私たちがこれまで専念してきた学問が含まれます。それらの学問を深めるにあたっては、方向を見誤って道に迷うこともあり、その結果、場合によっては長い間、その誤りや弱点に思い悩み、苦しむこともあるでしょう。が、研究を絶えず進展させることによって、そうした誤りや弱点が取り除かれ、徐々に熟成し完成度を増していく学問であります。歴史学 (Geschichte) や言語研究 (Sprachforschung) がそうですし、もちろん詩学 (Poesie) も厳密でない学問に含まれます。同様に、歴史の所産たる法学 (das der Geschichte anheim gefallene Recht) もまた、弱点のない完璧な厳密性を有することなどない学問であります。陪審員の判断は、数学の計算問題を解くことではなく、素直な人間の理解力、常識 (Menschenverstand)

の問題であり、そこには間違いもまた、当然紛れ込んでくるものなのです。戦争にさいしては、砲兵隊は精密な原則に基づいて行動しなければなりません。そうすることによって、やって来た騎兵隊に対して、敵陣に切り込み、首尾よく敵地を占領することを求めることができますのであります。

厳密な学問によって或るものが別種のものとなり、有益な結果をもたらすこともあります。すなわち、厳密な学問は、それ以上分解できない元素を分析、解明し、それらの元素を新たに組み合わせ、合成します。これまでの歴史において、人類を驚かせ、目をみはらせた着想や発明、その推進力の源のすべては、そうした厳密な学問の結果、生じてきたものであります。そしてまた、その研究で発明、発見されたことが様々な分野に応用されるようになると、その成果はすぐさま人類の共有財産となります。そうであるからこそ、諸々の厳密な学問は、普遍性を持ち、あらゆる人々にとって、限りない魅力をもっているのです。

それに対して、厳密でない学問の成果は、緩やかで地味なものであります。また、個々人の素質や性分をドイツの歴史学やドイツ語の探求に心底から向けさせ、繋ぎとめるためには、あらかじめ、そのための足固めとなる周到な準備が必要であります。他方、化学者や物理学者の講義室は、時代精神（Zeitgeist）を意識することなく勉強に熱中する学生たちで満ち溢れております。

しかし、そうした現状にもかかわらず、総合判断（Combination）の豊かさという観点から厳密な学問と厳密でない学問とを比較すると、文献学者や歴史学者は、もっとも才能ある自然科学者と比べてみても、決してひけをとることはないのであります。それどころか、私は、文献学者や歴史学者たちが、もっとも解決の困難な課題に対しても勇敢に立ち向かっていること、それに対して、精密な学問に従事する者は、解決を図ることが困難な、どうにも見通しがきかない難題から逃れていることに気付いております。一例を挙げるならば、或る植物がしだいに色や香りをさまざまに変化させながら成長していくのは何故なのかということ、精密な学問は明らかにすることができるのでしょうか。しかし、歴史的な出来事の最先端に気づくことなく見過ごしてしまう生徒たち（Schüler）にとって、（そのような問いに煩わされることなく—訳者補足）あらゆる物理学の体系を学ぶことのほうが、彼等の心を容易に捉えるのであります。

実際、私たちの学問分野が受けている不利益あるいは不都合といったものは、いくら強調しても足りないように思われます。そこで私は、私たちの学問、すなわち厳密でない学問の価値を強調し、時代の（自然科学万能とか厳密な学問を称揚する一訳者補足）風潮に逆らって、私たちの学問はあらゆる時代に深い影響力をもっている、という私の見解を表明しようと思います。私たちは、祖国の大地（der Boden des Vaterlandes）に立つほうが、異国の地にいるより確と立つことができ、慣れ親しんだ郷土の感情のすべてと緊密につながることができます。それに対して、人類（das Menschengeschlecht）を喜ばせ熱狂させるあらゆる発見、発明は、図示的な叙述、化合物などから或る物質を析出するといった創造力から生じてくるものなのです。

坩堝、つまり化学工場で使う耐熱性の容器のなかの液体は、どの国で熱を加えられても一定の温度で沸騰します。また、新たに発見された植物は、ラテン語でもって冷やかな学名を与えられます。そして、その植物は、同じ標高の気候のなかなら、世界中のあらゆるところで見つけることができるのです。しかし、私たちは、はるか昔に失ってしまった古ドイツ語を新たに掘り起こし、探し当てることのほうが、外国語を用いるよりもずっと喜びを覚えるものであります。というのも、私たちは、みずからの国において失ってしまった言葉を、ふたたび手にすることができるからです。祖国の歴史のなかに埋もれていた事柄を発見すること、それらのなかには（たとえそれが、どんなに些細な事柄であったとしても一訳者補足）味も素っ気もないというものはひとつもなく、そのすべてが祖国に受け入れられ、祖国に役立つであろうと思います。（グリム兄弟は、1816年に『ドイツ伝説集』第1巻を編集出版する。その「序文」でヤーコブは、こう記していた。「故郷（Heimat）というものによって何びとにも一個の守護霊（ein gutter Engel）がつけられている。私たちが人生に乗り出す時、いつもこの霊が親しい道連れとして付き添う。これがいかに有難いことかもし分らないならば、一度祖国（Vaterland）の境を越えて守護霊から離れてみるがいい。たちまちその有難さを痛感するであろう。この慈しみ深い道連れとは、童話（Märchen）、伝説（Sage）、歴史（Geschichte）という無尽蔵の宝のことである。（略）私たちはこの伝説集をドイツの文学、歴史、言葉を愛する人々に捧げる。そしてここに集めたものが、生粋のドイツ料理であるという、ただそれ

だけの理由からでもすでに喜んでいただけるものと期待する。何となれば、祖国の産物以上に私たちを涵養し、深く喜ばせるものはないからである。祖国にかかわる学問においてなされる発見や努力は、いかに些細なものであっても外国種の華々しい導入や育成より、はるかに多くの実りをもたらす。外から持ち込まれたものは常に安定を欠き、極端に走りやすく、胸に抱いても暖かくないからである。——さて、今こそ歩み出る時である、と私たちには思われた」。Deutsche Sage, hrsg. von den Brüdern Grimm, Band 1. 1816. Insel Verlag, 1981. SS. 9, 20-21. 桜沢正勝・鍛冶哲郎訳『ドイツ伝説集 上巻』人文書院、1987年、i, xii頁。一訳者補足）。

厳密な学問は世界全体に及び、外国の学者たちにもその成果を分かち与えることができます。しかし、厳密な学問は、民族の心を捉える、ということはありません。

ところで、詩（die Poesie）は、まったく学問などと呼ばれてはならないものか、あるいは、学問のなかの学問と称されなければならないものか、そのいずれかでありませぬ。と申しますのも、詩は光り輝く太陽にも似て、人間のあらゆる生活環境を照らし出してくれるからであります。詩は、轟音をたてて線路の上を走り去っていくものではありません。それは、穏やかな波に乗ってさまざまな土地を流れていくか、あるいは緑なす谷に沿って聞こえてくる小川のせせらぎのように、歌声となって鳴り響いてくるものなのです。そしてまた、詩はいつも、故郷の言葉（heimatliche Sprache）から生まれ、文字どおり、そこだけで理解されることを望んでいるのであります。

ここで私は、あえて問いたいのであります。ドイツの自然科学者（Naturforscher, 厳密な学問に従事する学者のことか一訳者補足）のなかで、一体、ゲーテやシラーが積み上げた業績と比肩しうる人物が、かつていただろうか、と思うのです。

私は、遠の昔からドイツ民衆の口伝で歌われていた叙事詩（Lieder）に着目し、それらを素材に「法における詩学」（die Poesie im Recht）と題する論文を、以前、執筆したことがありました。昨日のこの大会で、この論稿に触れ、賛辞を述べてくださった私たちの仲間である或る人物（ルートヴィヒ・ウーラント Ludwig Uhland, 1787-1863. ドイツの詩人、弁護士を指す。彼は、このゲルマニステン大会に続く1848年の「フランクフルト国民議会」においても、ヤーコブと同様、議員に選出された。ウーラントは、1846年9月24日の大会初日冒頭の議長選出にさ

いして、1815年に書かれたヤーコブのこの論文に触れながら、こう述べた。「投票することに代えて、或る人物を議長に任命してはどうか。この人の手には、長年にわたってドイツ歴史学のすべての筋糸が集まり、またその人の手から、初めて幾つもの縫り糸が伸びていったのです。すなわち、詩学、ポエジーという黄金の糸のことであります。この人は、ともすると無味乾燥なものと思われがちな学問、つまりドイツ法学において、その糸をみずから紡ぎ出したのです。この人の名前は、もはや挙げるまでもないことでしょう」。結局、選挙に代わる満場の拍手でもって、ヤーコブは議長に選出された。一訳者補足)は、古くから歌い継がれてきた私たちの民族歌謡、民謡に、誠実に精魂傾けて向き合っております。この素晴らしい大広間と同様(ヤーコブ・グリムのこの講演が行われた第1回ゲルマニステン大会は、帝国都市フランクフルトのレーマーのカイザーホール、ローマ人館の皇帝の間、で開催された。そこには歴代皇帝の肖像画が掲げられていた。一訳者補足)、こうした叙事詩、民謡の蒐集(diese Sammlung)はかつての時代を書き留めておりますが、しかしまた、後世の人々によってひろく伝承されることでしょう。この広間に館の主(Bauherr)が居並んでいることは、素晴らしいことだと思われませんか。

ところで、私たちの仲間である二人の有名な歴史研究者が、この会議に参加しております。彼らは、その著作を通して、ドイツ人の情緒、感性がいかに多様に満ちたものであるかということを褒めたたえておりました。そして、これまでの彼らの果たした仕事のうえに、さらに深いまなざしでもって別の友人が、私たちの文学史のさらなる真髄を探求したのでした。その結果、それ以前には、少数の人々に限定されていた彼らの深い知識が、今や世間に広まり、多くの人々がその喜びを分かちあうことができるようになりました。

言語の探求にかんしても、こうした喜びを見いだすことができるように思います。と申しますのも、言語の探求は、文法上の輝きなどわずかしかないと思われていたドイツ語の語句から、光り輝くものを引き出そうと試みます。つまり、各自に家で、もっとも簡素で平明な観察を行ない、それによって、古くから馴染んだ言語を、つい最近見知らぬ他国から入った要素と照らし合わせ、固有の言語、その文法を洗い出そうと試みます。いつの日か、首尾よくその探求がなされたならば、これまで日の当たることなどなかった場面に光りを差し込むことができ、背後に隠れ、目立つ

ことなどなかった事柄に対し、祖国（Vaterland）が誇りをもって顧みることができるのであります。何故なら、過去から伝わる文化遺産はすべて、現在に対して精神の糧を与えるだけでなく、未来に向かってもその滋養分を送り届けるからであります。

郷土の言語や詩歌のなかに埋もれ、眠っているものを揺り動かし、目を覚まさせることによって、ひとは生命を吹き込まれたその財産に大いなる価値を見だし、鮮明な感情を抱くに違いありません。

郷土の言語を掘り起こす仕事の成果はまた、遠く郷土を離れていった人々のもとへも届き、郷愁の念を癒す力ともなるでしょう。私は、今、この10年間途切れることなくアメリカへ渡っていった人々、つまりドイツ人移民のことを想起しております。つまり、言語に携わる仕事は、みずから求めていった移住先の新たな土地に住むその彼らのもとでも、郷土の古き言語を心に留め、そのことによってまた、母国（Mutterland）との暖かいつながりを保ち続けることにもなるのです。そのようにして、外国に入植したギリシア人のあいだ（Colonie, コロニー）ではギリシア語やギリシア文学が盛んに語られ、また、北アメリカにおいても、豊かなイギリスの文芸作品や歴史のすべてが、いつでも公然と屈託なく語られております。それらは、いわば移住していった彼らの固有の文化遺産のようにも思われます。政治的には二つの国に分断された後になっても、母なる国イングランドから絶えず流れ来る文化のなかに、アメリカの強みはあるのです。

私たちは、コロニーを入植者たちの植民市、大農場（Pflanzungen）と呼んでおります。まさにそうなのです。ヨーロッパの大地深くしっかりと根ざしている植物が、その種子を、はるかなる海を越えて新世界へと送り届け、豊かな実りをもたらしたのであります。自然科学者は、無数の草本の花弁や花糸が何本あるのかを数え、神の創造したあらゆる植物を（冷静に一訳者補足）際限なく分類し、配列していきます。被造物の驚異、不思議さ、世界のあらゆる大地へと広がる人類、そして、彼らが実際に為した行動やその展開過程の数々の歴史を、しっかりと示さなければならぬ仕事（これが厳密でない学問が従事する仕事の意か一訳者補足）以上に、精神を高揚させ、考察する価値があるものが、何かほかにあるでしょうか。同様にまた、無限の言語（Zunge）や方言（Mundart）へと分岐していく人間の言語の系統図を作

成することは、ポリアタミア (Polythalamien, 二枚貝の一種か—訳者補足) やバシラリア (Bacillarien, 単細胞性の藻類の一種か—訳者補足) といった新たな種の輝かしい発見以上に、私たちが強く突き動かし、私たちの学問を促しはしないだろうか。

言語や詩歌、法や歴史における人間らしさ、人間味のあるものは、動物や植物、元素といったものより、いっそう親密に感じ、さらなる熱い思いを抱かせるものがあります。それを武器にして、国民的なるもの、民族固有のもの (das Nationale) は、疎外感を覚える縁遠いもの (das Fremde) に打ち克つのです。ドイツの自然探求者と古典語研究者のなかにあって指導的な役割を果たしている方々が参集したこの大会の成果に、みずから満足することなしに、ドイツの公衆にとっても、私たちのこの会議に、絶えることのない関心、喜びや充足感を呼び起こすことのできる影響力があるのかどうか。実はこの点に、課題を解決する手がかりとなる鍵が存在しているのです。